

【ポスター発表】

介護職員の高齢者ケアに関する価値観と自尊感情の日韓比較研究

○ 聖隷クリストファー大学社会福祉学部 古川 和稔 (8501)

キーワード：日韓比較、ケアに対する認識、自尊感情

1. 研究目的

本研究の目的は、日本と韓国の介護職員の高齢者ケアに関する認識を比較し、両国間の差異や課題を検討することである。

2. 研究の視点および方法

東アジアでは今後、世界でも例をみないほど急速に高齢化が進行すると予測されているが、公的介護サービスという点では、日本と韓国が先行している。日本は介護保険制度（2000年施行）、韓国は老人長期療養保険制度（2008年施行）により、すでに両国には権利としての介護サービス利用が保障されている。また、介護サービスを提供する専門職として、日本では介護福祉士、韓国では療養保護士が、いずれも国家資格として制度化されている。高齢者ケアのあり方については各国で対応が検討されているが、制度やサービスの検討のみならず、介護職員の高齢者ケアに関する認識も、介護の社会化においては重要な要素の一つである。このような状況から、東アジア諸国の今後の高齢化対策を検討するうえでは、長期療養型ケアシステムが法的に整備されている日本と韓国を対象に、介護職員の高齢者ケアに関する認識を分析しておく必要があると考える。

そこで今回、日韓両国の介護職員の、高齢者ケアに関する認識を比較することとした。「高齢者ケアに関する認識」といっても、研究者の視点によって捉え方は様々であることから、先行研究を踏まえて、(1) 介護の仕事に対する自己認識、(2) 現在の仕事に対する満足度、(3) 高齢者の生活に関する意識、(4) 介護職員の自尊感情、の4つの視点で調査を実施することとした。

日本では9施設へ質問票345通、韓国では6施設へ質問票265通を郵送した。日本では195通（有効回収率56.5%）、韓国では147通（有効回収率55.5%）の有効回答が得られた。本稿では介護職員のみを分析対象とするため、日本（137名）、韓国（139名）のデータを分析した。

3. 倫理的配慮

調査票の表紙に「回答者の権利やプライバシー、研究倫理に関する約束」を添付し、回答は自由意思であること、アンケートの提出をもって研究協力に同意したと判断させてい

ただくことを明記した。なお、本研究は聖隷クリストファー大学倫理委員会の審査を受け、承認を得てから実施した（認証番号 16003）。

4. 研究結果

日本では 195 通（有効回収率 56.5%）、韓国では 147 通（有効回収率 55.5%）の有効回答が得られた。ただし、本報告では、研究目的に沿って介護職員のみを分析対象として抽出した。日本では、137 名の介護職員から回答が得られたが、うち 1 名は自尊感情に関する質問には未回答だったため、自尊感情の分析対象は 136 名、それ以外の質問の分析対象は 137 名となった。韓国では、介護職員 139 名から得られた回答を分析対象とした。

詳細は当日報告するが、「介護の仕事に対する自己認識」では、2 問とも、日本の方が肯定的回答の割合が高かった。

「世間からどう思われているか」については、「介護の仕事に対する自己認識」とは対照的に、2 問とも韓国の方が肯定的回答の割合が非常に高い結果となった。

「現在の仕事に対する満足度」における肯定的回答の割合は、給与では 43.5 ポイント、仕事内容では 36.3 ポイント、勤務体制では 35.4 ポイントと、いずれも韓国が日本を大きく上回った。仕事への熱意については、両国とも 80%以上が肯定的回答を示し、わずかながら韓国が日本を上回った。

「高齢者の生活に関する認識」における肯定的回答の割合は、「高齢者は、施設ではなく、自宅で暮らした方が良い」では 12.6 ポイント、「高齢の親の世話は子どもがすべきである」では 36.4 ポイント、「可能であれば三世代同居が望ましい」では 99.6 ポイントと、いずれも韓国が日本を上回った。また、「祖父または祖母との同居経験が十分にある」でも 25.5 ポイント韓国が上回った。

自尊感情に関する日本と韓国の意識の相違点を検討するために、自尊感情に関する項目のクロス集計を行ったところ、全ての項目で有意差がみられた。「もっと自分自身を尊敬できるようにになりたい」以外は、全ての項目で日本より韓国の方が肯定する割合が多い結果となった。

5. 考察

本研究により、日本の介護職員は韓国の介護職員と比べ、介護の仕事について自らは「専門性が高く、社会的に意義のある仕事」と認識している一方で、「世間からの評価が低い仕事」と認識していることが分かった。その認識の低さが、仕事の満足度の低さ、自尊感情の低さにつながっていると考えられる。一方、韓国の介護職員は高い自尊感情を示したが、この高い自尊感情に対しては、第三者による業務評価の機会を設けるなどの対応により、一定水準のケアレベルを保つ仕組みを検討する必要があると考える。